

家庭科における食情報に関する学習内容と指導方法の検討（Ⅱ）

— 主体的な判断を促す授業 —

萱島 知子 鈴木 明子 高橋美与子 井川 佳子
木下 瑞穂 松原 主典 佐藤 敦子
(協力者) 一色 玲子

1. はじめに

生活者の食品の機能性に対する関心は高く、一方で様々な食情報が提供されている。中には、食品を総合的に捉えるのではなく、特定の機能性成分を強調する情報もみられる¹⁾。これらの食情報は生活者の食生活に影響を与えている。米国では、食品の機能性に関する情報により食品が健康に与える影響を過大に評価し盲信するフードファディズム (food faddism) が生じるとして1950年代から問題視されてきた²⁾。近年、日本でも、テレビ番組で紹介された白インゲン豆のダイエットを試みた視聴者に健康障害が生じ、厚生労働省から注意勧告が出された事例³⁾や、商品が品薄になる程反響のあった納豆の健康効果を紹介したテレビ番組の内容が虚偽のものであった事例⁴⁾がある。

家庭科は日常生活の課題を取り上げて、一人ひとりの生徒が自分の生活を振り返り、よりよく改善するための方法を考え、実践することをめざす教科である。したがって家庭科は以上のような食情報の問題に対応できる教科であるが、実践の事例は少ない。著者らは平成19年度学部・附属学校共同研究において、食情報について考える授業の設計を行った⁵⁾。その結果、食情報を判断することを教師が提案するのではなく、学習者が出した意見から食情報を読み取る観点を整理して示し、改めて食情報に自分はどうのように向き合うかを考える場面をつくることが重要であることが示唆された。また、こうした生徒の主体的な判断を促す授業において、食情報の問題を食情報側と生活者側の観点から整理することも必要であると考えられた。

本研究の目的は、前年度の授業設計の要点と課題を整理し、家庭科において食情報を主体的に判断することを促す授業の提案を行うことである。前年度の授業においては食情報を批判的に判断する観点に重点を置

いたが、本研究では食情報の問題点を考えることを通じて食情報の読み方を考えることに重点を置いた。

2. 授業の概要

(1) 授業設定の意図

本時が位置づけられている題材の設定理由、全20時間の計画及び本時「食情報について考える」のねらいと学習過程を学習指導案として示す(資料1)。前年度と同様に、「家庭基礎」を選択している広島大学附属福山高等学校の年間カリキュラムにおいて食情報の授業を効果的に位置づけることを試みた。

授業設計では、前年度の授業実践より、生徒から食情報について意見を引き出すためには事例を提示する必要があると考えられたため、本時においてもクルミの健康効果について書かれた新聞記事を例示し内容を読み取る活動を取り入れた。その際、生徒が食情報の内容を理解しやすいように、読み取るポイント(食品の魅力、そう考えられる要因)を提示した。

マスメディアから提供される食情報は、情報を提供する側であるマスメディアの情報選択や表現によっては、情報伝達に誤りが生じることが指摘されている⁶⁾。このように食情報が生活者に与える影響には、情報を提供する側の問題も関わっている。このため、本授業では食情報を受け取る側と食情報を提供する側から食情報の問題を考える活動を行うことにした。これにより、視点を変えて食情報について考えることや、食情報を多面的に捉えることができ、生徒の主体的判断を促すための授業が可能となる。

(2) 授業の概要

授業は、高橋によって、2008年11月に附属福山高等学校1年生を対象に実施された。今回の分析対象クラ

資料1 本時の目標と指導過程

本時の題材「食情報について考える」

本時の目標

1. 日々テレビや新聞など身近なメディアから流されている食情報には、どんなことが示してあるのかを理解し、それらが自分たちの食生活に様々な影響を及ぼしていることに気づく。
2. 健康への被害など食情報が原因となって起こった問題点の原因を、情報を流す立場と受け取る立場の両面から考える。
3. 食情報を主体的に判断するための読み取り方を身につけておくことの大切さに気づき、食情報を受けとめるときに大切なことは何かを話し合う。
4. 食情報を受けとめ活用するときの観点を理解し、活用することができる。

学習過程

過程	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点・評価	分
導入	食情報の現状	「〇〇が△△に効く・効果がある」というような食品の機能性に関わる情報についての経験を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒から集めた食情報を紹介し、身近に多くの情報が、あることに気づかせる。 ・ 学習内容に興味を持って授業に参加しようとしているか。 	5
展開	a. 食情報とは何か	「クルミの健康への効果」を説明している新聞記事を読んで、食情報には何が書いてあるのかを確認する。	食情報には、その食品の魅力とともに、そう考えられる要因の2点が必ず示してあることを押さえる。	10
	b. 食情報の問題点	<p>今までに身近に起こった食情報の問題点を確認する。</p> <p>自分が情報を流す立場になったときに、そこにはどんな思いが生じてくるのかを考える。</p> <p>フードファディズムの意味とその発生条件から、消費者（情報を受け取る立場）の問題点を理解する。</p>	<p>様々な問題点が起きた背景には、情報を流す側と受け取る側の両者に原因があることを確認する。</p> <p>問題点が発生するのは、情報を流す側のどんな気持ち優先してしまうときなのかを考えさせる。</p> <p>食情報を主体的に判断するための読み取り方を身につけておくことの大切さに気づかせる。</p>	15
	c. 食情報の読み方	<p>「クルミの健康への効果」を説明している新聞記事を読んで、その内容の問題点を話し合う。</p> <p>どんなことに気をつけて食情報を受けとめるといいのかを話し合う。</p>	話し合いに積極的に参加させる。	10
まとめ	日常生活への生かし方	食情報を見たり読んだりするときに大切なことは何かをまとめ、これからの生活にどのように生かしていくとよいのかを考える。	これからの生活に生かしていこうとしているのかを記入内容によって評価する。	10

スは2クラスである。表1に2クラスの人数を示す。

表1 授業実践クラスの人数

クラス	人数	男	女
A	39	24	15
B	39	25	14
計	78	49	29

3. 授業分析と考察

(1) 分析および考察の視点

授業で使用したワークシートでは、生徒の意見を個別に記述させた。問い1では主体的に判断するために必要なこと（食情報を読み取る観点）を整理させた。これをうけて、問い2では食情報の主体的判断を実生活に生かすことを考えさせ、問い3では食情報を提供する側の立場を踏まえて食情報を読み取る観点を客観的に捉えさせた。本時の指導の効果を考察するために、これらの問いに対する生徒の意見を分析した。ブルームの提案する認知領域の学習水準^{7,8)}を基に本研究における評価の観点（試案）を作成し（表2）、問いに対する生徒の記述を総合的に判断し最も当てはまるものに分類した。記述の分類は、家庭科を専門とする者3名によって行った。

(2) 食情報を主体的に判断するための食情報の読み取り方の理解

問い1では「消費者として食情報を見たり、読んだりするとき大切なことは何だと分かりましたか？」

表2 本授業における評価の観点（試案）

学習水準	評価の観点
知識	食情報を主体的に判断することを認識する
理解	食情報を主体的に判断するための読み取り方を説明する
応用	食情報を主体的に判断するための読み取り方を具体的に説明する
分析	食情報を主体的に判断するための読み取り方を食情報の問題から分析する
総合	食情報を主体的に判断するための読み方を食情報を提供する側と受け取る側の観点から分析し、これまで家庭科で学んできたことについても言及する。
評価	これまでの家庭科の学習内容と関連付けて、食情報を主体的に判断するための読み方を食情報を提供する側と受け取る側の観点から分析し、説明する

という問いかけを行った。この問いかけから食情報を主体的に判断することに対する認識を分析した。

結果を図1に示す。全体78名のうち、77名に問いに関連する記述が読み取れた。全体として「知識」(21.8%)と「応用」(26.5%)に分類されたものが多かったが、記述者の割合は特定の水準に集中しておらず分散していた。多くの生徒が食情報を主体的に判断することの重要性に気づき、その読み取り方を「理解」以上の水準で認知していると判断できる。男女別で比べると、「理解」、「応用」、「分析」は男子の方が、「総合」、「評価」は女子の方が高い割合を示す傾向がみられた。これより、読み取り方の認識は男女で若干の違いがみられ、多面的な視点から食情報を判断する者は女子に多いといえる。

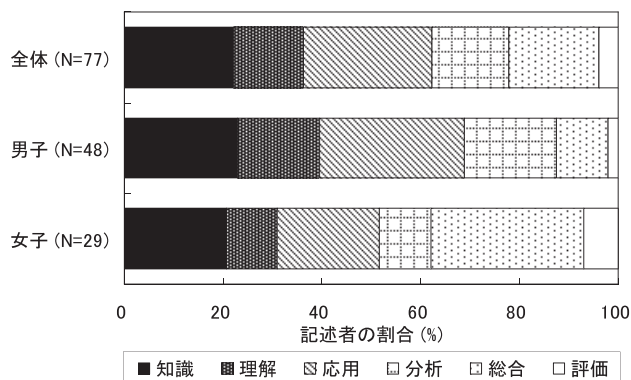


図1 食情報の読み取り方の認識

(3) 食情報を主体的に判断する意思

問い2では「自分のこれまでの生活を振り返って、今日の授業の内容を生活にどう生かしますか？」という質問を行った。この問いより食情報を主体的に判断することに対する実践を読み取ることにした。

問いに関連した記述は70名にみられ、このうち食情報を主体的に判断する意思が読み取れた記述は67名であった。図2に示すように、全体として「知識」、「理解」、「応用」の水準に分類されたものの割合が高く、特にその傾向は男子に見られた。「評価」には、男女それぞれ1名のみが分類された。食情報の読み取り方を問う問い1（図1）と比べ「総合」と「評価」の割合が低かったことから、食情報を主体的に判断することに対する認識と実践にはずれがあると考えられた。これに関連して、問い1の回答で「知識」、「理解」に分類されたものをA群、「応用」、「分析」、「総合」、「評価」に分類されたものをB群として、問い2の結果を整理したものを図3に示す。これより、食情報の読み取り方の水準が高かったB群は、A群よりも高い水準で食情報を主体的に判断することを実践する意識がみ

られる。以上より、完全には一致しないものの、食情報を主体的に判断することを実践する意識は、読み取り方の認識とある程度の関連がみられるといえる。本授業では問い1から問い3を連続して生徒に記述させている。したがって、問い1の段階で意見を発表し他の人の意見を聞くなどの活動を取り入れることにより、食情報を主体的に判断するために必要な食情報の読み取り方の認識を深め、食情報を主体的に判断することに対する実践力を高められる可能性がある。

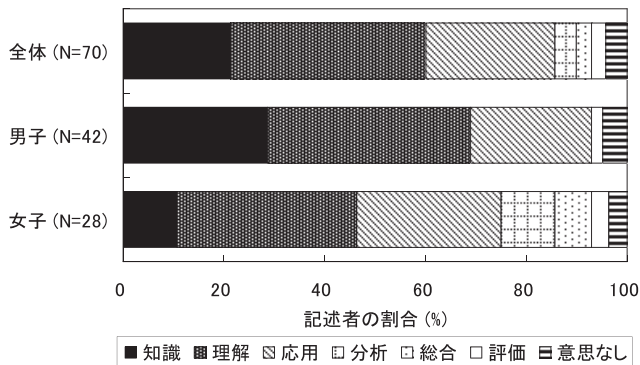


図2 食情報を主体的に判断する意識 (男女別)

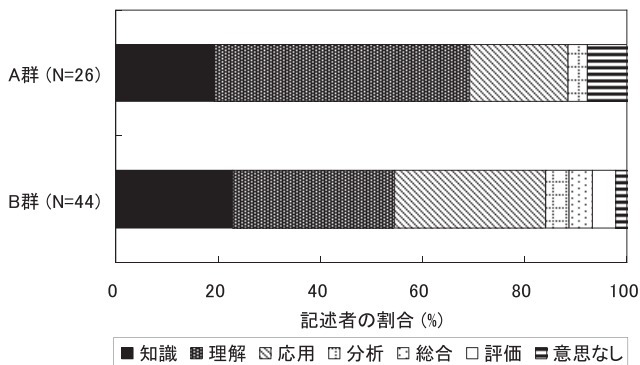


図3 食情報を主体的に判断する意識 (読み取り方の認識との関連)

食情報を主体的に判断する意識がないことを明確に記述したものは3名みられた。これらの具体的な記述をみると食品の機能性に関する関心が低いことが原因と考えられるものがある(資料2)。しかし、主体的に判断する意識を読み取ることができる記述のなかでも「あまり今まで食情報を見たりはするものの、ダイエットもする必要がないし、健康だったので、自分で実際に試したことはなかったのですが、もしそのような健康状態になったとしても、今日の授業を思い出して生かしていきたいと思います。」「今までひっかかってこなかったが、未来はひっかかるかもしれないので、このことを覚えておいてひっかからないようにしたい」といった記述もあり、必ずしも食品の機能性に関

する関心のみが影響しているとは言えない。この点については今後検討する必要がある。

資料2 食情報を主体的に判断する意識がみられなかった意見*

男子A：あまり食にこだわらないので生かさないかも
 男子B：ん～あまり生かす機会がない
 女子a：今まで、そういう事にあまり興味がなかった
 ので、今の感じでやっていったらいいのかな
 と思った。

*生徒の記述(原文のとおり)。以下、資料3,4も同様。

資料3に示すように、生徒の記述には食情報に対して極端に否定的な意見もみられた。食情報にだまされるや踊らされるといった記述から、食情報自体を否定するものとして受け止めた者がいることが分かる。食情報は受け取る側の読み方によっては、食生活に有益な情報を与えたり、新たな知識や食に対する興味を刺激したりするものでもある。したがって、授業では食情報の全てを否定するのではなく自ら判断していくという態度が必要であると考えられた。

資料3 食情報に対する否定的な意見

男子C：だまされない
 男子D：今までひっかかってこなかったが、未来はひっかかるかもしれないので、このことを覚えておいてひっかからないようにしたい
 男子E：だまされないようにする！保証人にはならないように気をつける！
 男子F：あまりダイエットには興味がなかったし、長続きしにくい自分の生活はよかったと思った。これからは余計にだまされないようにしようと思った
 男子G：情報に対して否定の目でみる
 女子b：とにかく、文章にだまされないようにします!!
 女子c：メディアに踊らされない
 女子d：朝バナナダイエットに少し興味がありましたが、やっぱりやらないどころかと思いました。メディアに踊らされるピエロになる前に気付くことができて良かったです。

(4) 食情報を読み取る観点の転換

問い3では「自分が将来、食情報を提供する側になったとしたら、どのような方針で情報提供を心がけたいですか?今日の授業と関連させて、理由とともに書いて下さい。」という質問を行った。

問いに関連した記述が見られたものは75名であった。図4に示すように、全体的に、「分析」に分類されたものが多かったが、結果は各項目に分散した。しかし女子では、「総合」に分類されたものも多く、こ

の傾向は男子とは異なっていた。一方、問い1における学習水準で分類した結果(図5)を比較してみると、B群はA群と比べより高い水準に分類される割合が高かった。以上より、食情報を提供する側の立場を踏まえて食情報を読み取る観点を客観的に捉えさせた結果、特に食情報を主体的に判断することについて認識が高い者および女子に対して、食情報を多面的に捉えさせることができたといえる。

資料4のように、マスメディアや食品販売者といった情報を提供する側の立場から、利益追求に重点を置いた意見や市場の問題について触れた意見がみられた。これらの意見の多くは男子のものであった。このような意見には、社会科をはじめとする他教科と連携することで対応できる可能性がある。

4. まとめ

本研究では、食情報を受け取る側と食情報を提供する側から食情報の問題を捉え、読み取り方を考えることにより、食情報を主体的に判断することを促す授業の設計を試みた。授業評価として、ブルームの認知領域の学習水準を基に評価の観点(試案)を作成し、ワークシート記述から読み取った生徒の意見を分類した。ほぼ全員の生徒が食情報を主体的に判断することの重

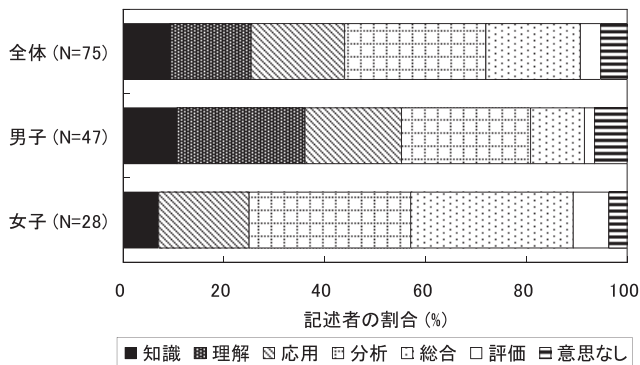


図4 食情報を読み取る観点の転換 (男女別)

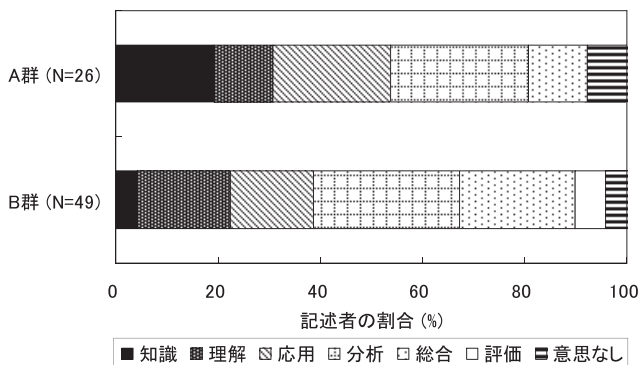


図5 食情報を読み取る観点の転換 (読み取り方の認識との関連)

資料4 食情報を提供する立場を強調した意見

男子H：人々がちょっとした情報にだまされやすいことが分かったので細かいいうそともいえない情報を使い消費者(頭の悪い)をだましていきたい←もうけたい
 男子I：デメリットもまじえつつ説明する。お金もうけの妨げにならない程度に
 男子J：需要の過剰を防ぐため、供給量を見て発信する。さらに方法としてより自分に利益がでる方向にもっていく。
 男子K：人が信じて、そこそこ良いだろうという情報を流す。100%良い情報だともうけが少なそう。
 男子L：消費者及び自分に利益が出るように努める
 女子e：でもやっぱりもうけたいから良い点もいっぱい出す。(注意点)このようなことを少しでものせておきます。

要性に気付き、さらに8割程度の生徒がその読み取り方を「理解」以上の水準で認識していた。食情報を主体的に判断することに対する認識と実践にはずれがみられたが、食情報を主体的に判断することに対する認識が高い者は実践への意識も高い傾向があった。

以上より、本研究で提案した授業から、食情報の主体的判断の認識と連動して、食情報を主体的に判断することに対する実践力を高める工夫を行うことが今後の課題として考えられた。また、食情報に対する否定的な考えを生じさせない配慮、他教科との連携についても今後検討する必要がある。

引用(参考)文献

- 1) 萱島知子, 井川佳子「消費者雑誌にみる食品の機能性の記事に関する研究」, 日本食生活学会誌, 19, 124-131 (2008)
- 2) Robin, B.K., Robin, M.-K.(著), 高橋久仁子, 高橋勇二(訳)『栄養と行動(Nutrition and behavior)』, アイピーシー, pp.1-9 (1994)
- 3) 厚生労働省食品安全部監視安全課「白インゲン豆の摂取による健康被害事例について」(2006), <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/05/h0522-4.html> (2009年1月10日現在)
- 4) Cyranoski, D. "Japanese TV show admits faking science", Nature, 445, 804-805 (2007)
- 5) 萱島知子, 高橋美与子, 井川佳子, 木下瑞穂, 鈴木明子, 松原主典, 佐藤敦子『家庭科における食情報に関する学習内容と指導方法の検討—高等学校「家庭基礎」における授業の設計—』, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 36, 397-404 (2008)
- 6) 赤松利恵「マスメディアが伝える食と健康情報—

新聞報道の実態と問題点―」, 保健の科学, 48, 349
- 352 (2006)

7) B.S.ブルーム他 (著), 梶田叡一, 渋谷憲二, 藤
田恵璽 (訳) 『教育評価法ハンドブック―教科学習
の形成的評価と総括的評価』, 第一法規出版,

pp.429-433 (1977)

8) エリザベス・J・ヒッチ, ジューン・ピアス・ユ
アット (著), 中間美砂子 (監訳) 『現代家庭科教育
法 個人・家族・地域社会のウェルビーイング向上
をめざして』, 大修館書店, pp.106-111 (2005)